

博物学研究 その5

～蕎麦猪口～

川瀬 基弘

愛知県立大学人間科学部

1. 蕎麦猪口とは

蕎麦猪口は、「そばちょこ」または「そばちよく」と読み、蕎麦のつけ汁を入れるための容器のことです。猪口の読みは「ちよく」が転じて「ちょこ」となりましたが、既に江戸時代には両方の読み方があったようです。語源は、中国福建語または朝鮮語で鐘(チョク)という器に猪口という漢字を当て字した、或いは形からもイノシシの口を想像できるからという説があります。

今日では蕎麦を食べる容器として広く知られていますが、もともとは酒器として酒が注がれたり、向付(むこうづけ)として和え物や塩辛などが盛られたりしていました。形や大きさも様々でしたが、現在の標準形は尻すぼみの円筒形で口径は7cm前後です。一般的な湯飲みやコップより一回り大きくも高さは口径よりも小さいか同程度です。ではなぜこのような形が標準的になったのでしょうか。小川(1974)は父から教わった蕎麦の食べ方を次のように記しています。「ちょこは左で軽く押さえ、蕎麦は汁につくかつかないか程度のところで、スルスルとやれ、蕎麦が長いからといって切ったりするな、立ち上がって食べる」。要するに食卓の上に置かれたまま蕎麦が出入りするの、安定性を高くするために設置面積が広いこと、汁が飛び出さない程度の深さがあること、蕎麦湯を飲むときに片手で持ちやすい大きさであることから今の形になりました。

2. 魅力とデザイン

骨董入門は蕎麦猪口から、と言われるようにシンプルな形であるにもかかわらず、多種多様な文様が描かれており、その絵柄は数万種を超えるとも言われるほどです。相当古い物から新しい物まで幅広い時代の流れを楽しめること、実用的には応用範囲が広く蕎麦だけでなく向付として食卓にアクセントを与えること、他の古伊万里製品より入手しやすいこと、比較的安価な価格のものが多いことなどが、愛好家が多い理由です。

絵柄で圧倒的に多いのが植物文様です。花では、菊、牡丹、蘭、燕子花(かきつばた)、菖蒲、水仙、櫻、椿、鉄線、撫子、藤、朝顔、樹木・菜果では、松、竹、梅、銀杏、楓、桐、柳、瓢箪、人参、栗、蕪、葡萄、茄子、桃、瓜、柘榴です。その中でも特に春の草花を画材としていることが多いようです。植物に比べると数分の一ともいわれますが、代表的な動物文様としては、鳳凰、獅子、龍、馬、鶴、亀、兔、蝙蝠(こうもり)、鷺、雀、鴛鴦(おしどり)、虫、貝などがあります。他には、山水、人物、唐草文様、舟、唐子、風雨、波、渦なども描かれています。また、幾何、文字、記号、宝物などの文様にも様々なデザインがあります。

文様は外側面だけではなく、見込みや内面の口縁部に描かれていることもあり、猪口を裏返せば高台内に銘が描かれることもあります。これらの文様の大部分は酸化コバルトを主成分とするコバルトブルーに発色する呉須で描かれていますが、濃淡も様々で1点ずつ手描きされていますので、同じデザインでも全く同じものは存在しません。また、一口に青といっても燃焼温度、コバルト以外の含有鉱物、還元焼成あるいは酸化焼成などの違いにより、様々な色合いの異なる青色があらわれます。

呉須絵具を使って素焼きした素地の上に文様を表し、透明釉を施して焼成された製品を染付といいます。一般的な蕎麦猪口は染付ですが、色絵のものもあり錦と呼ばれています。

ところで蕎麦猪口の主素材は、陶器、炆器、磁器ですが、原料の土や釉薬や燃焼温度などによって少しずつ雰囲気異なります。例えば、有田焼、瀬戸焼、砥部焼などの磁器は、地の色が白くて硬く表面が滑らかで、唐津焼、萩焼、備前焼、信楽焼などの陶器は、地の色が土色で磁器より低い温度で焼かれています。

3. 時代を読み取る

蕎麦猪口の種類は数千種類とも数万種類ともいわれています。これらは飾って楽しんだり、使って楽しんだり用途はいろいろですが、やはり博物学的な資料と

しては時代を見分ける要素が含まれていることに学問的な価値があるといえるでしょう。高台を見れば大まかな時代を知ることが出来ます。江戸時代初期は厚手の上げ底の高台で特に底部が極端に厚く重厚感があります。生がけで肌色は薄墨色の濁りがあります。中期になると高台とは呼べないくらいのベタ底でわずかに縁取りがしてあり釉薬がかかっています。素焼きしてから絵付けをしてあるので肌色は青白色を呈するものが多くなります。後期はベタ底で輪形に臘抜きされてその他には施釉されます。輪形が残り、この輪の幅が広いほど時代は下がり、終わり頃には底には全く施釉されないものまで出現します。明治以降には銅版印刷が主流のベタ底となります。つまり、江戸初期のものはつくりが丁寧で高台がぼつたりと高く上げ底になっています。

色や文様や形や使いやすさなども大切ですが、作られた時代背景を考えながら蕎麦をいただくのもまた一段と美味しく感じられるのではないのでしょうか。

4. 参考・引用文献

- 中島由美 (2001) 古伊万里 蕎麦猪口・酒器 1000. 講談社, 東京.
- 小川啓司 (1974) そば猪口絵柄事典. 光芸出版, 東京.
- 高橋洋二 (2002) 実物大そば猪口事典(骨董をたのしむ 42[別冊太陽]). 平凡社, 東京.
- 豊田市民芸館 (1997) 第39回企画展 美濃・炆器染付展一幻の呼称 太白焼の世界-[展示図録].
- 矢部良明ほか (2002) 角川 日本陶磁大辞典. 角川書店, 東京都.

